



雜
乃
記
為
集

| | | | | |
|---|--------|-----------------|-----|-------|
| | 種 | 九 | 卷 | 上 |
| 附 | 第七 | 第六 | 第五 | 第四 |
| | 箴 刺 | 君子要其 龍不 其 | 魚化石 | 夢之冥士 |
| 附 | | | 麻娘 | 善知鳥 |
| | | | | ほへと非人 |
| | | | | さくし及至 |
| | | | | 新巻 |

15
122
1



飯台簞笠翁隨筆

巖意耕筆
野糞石影

烹禱乃記

前集二冊

門前曾
辨 122
卷 1

荒木藏

烹雜の記前集目錄

上卷

第一

新掘山

第二

多漢風流

附評

ほつと非人

附評

善知鳥

第三

麻娘く

第四

夢よ冥土

第五

魚化石

第六

君子思其罪不思其人

第七

箴刺

通計九種

上卷目錄果

全
三
十
字

下卷

第一 夷三郎

第二 天狗

附評 以惡見名

第三 以羊易牛

第四 實録の誤脱

附言 讀書の益

第五 後妻打

附評 孝女花扇

第六 浮瀨

第七 幸稚

第八 先板の訛舛

通計 十一種

下卷目錄果

翁名解字瑣吉一稱馬琴曲亭其別號也
 姓瀧澤氏江戸人世仕某藩為武弁之家
 父諱興義性長技擊而射御之術無不悉
 究其真與有子數人翁其季也翁以多病
 故本而隱市其所著詭詞冊子巧寫憂樂
 愁啼嬉笑怒罵之光景使閨人穉子估客
 村農不能不為解頤酸鼻千般萬般之態
 是以名噪一時坊賈捷利者獲翁之新著
 以為居奇而得其贏餘者有年矣今茲坊

賈弇與翁嗣子興繼相謀而建之蓋飲水
思源之誼也云 鵬齋與丹識

曲身翁京雜記成書時柏葉堂寫
鵬齋先生所為作曲身瘞草之銘移
次元序來清余書余嘗辱之老之知余
之拙也亦二老之所知也故不肯辭一書
以與之 文化辛未初冬 京山熊有



崖畧

この書はとく。童蒙の爲めはね流る水ぶれの
ゆりにしつゝ紙んまに由。浅き紙及び。深き紙及び。多
く唐山の書籍を引く。多くハ國字紙まゝえ寫したる
所あり。此とるく彼とるく。ひやうの綴りせられぬついで
京雜の記とやうに。さうまの紙とる人の筆はすまひせ
候鯖録といふのあり。何れもあらぬ。い
この書これのもふ止るたあらねど。時の後まゝ事紙抄せん
今僅々兩卷紙刊行と。これハ書賈が所爲るれど。予が
とんあは。後集續集。遠くらば草紙記とす。

一

予が著述每筆ちよぶものふ只速しんそくなる限りて刊かと決けつ。さればその編へん乃
てん本月このつれなごめの四月。あつにむひくさつとあり。よりて
八月の月より筆うでをとりをせん之。五日のほどふ。ふや廿四五頁ひゃくと
稿こうも果はたたりしう。あまりに物もの々々。童どう業ごうあつてふ。とて
おのりふあられが。あまらうをがむね扱あつか捨すてて更またもあつてしれ
るども。おのいせむる海うみの書しよのけつ。十月より至いたる一ひと巻まり
満みより。かまじが一ひと遍へんも草稿そうこうと更またど只ただてふをはのらう重かさり
きり。或あると文字あざなは脱だつしるあれが。やがよふころかひて。果はたに
敷紙しきしよといふのよ。然しかるころもあつたり。このあよ一日ひとひ由ゆ机つくえの
りより粘ねめたる骨ほねのるあまらうさちぞよる。かくまでふ

速すみしく。文ふみ体たいのりのつりもありや。ついで物ものもたる。口くちに
え移うつる。ついで誰たれの實事じつじよとせん。固かたより教しよとるのり
あるね。後のち々々で懸念けんねんせむ。あれ力ちから瘡かさ出いるとして。あま
いぬ書のしよをあさうらうさぶ。山のき移うつて。陶たう人にん如ごとく。ついで
日ひに後のちへるん。只ただあまの糸いとのほさるる。あも。經みた方かた小こ綴つづる。その
か。速すみなるより。速すみなる人ひともゆる。もせん。牧まき書しよも著しよしたる
燕えん石せき雜ざつ志し。おのいへの外ほかは。慎しん中ちゆう海かいより。ついでる。あまらうの
誰たれくん。或あるは。おのり。縣あが乃なり文人ぶんじんふ。打撃うちげされる。條じょうもあひ
さうらでも。備書びしよに。悟あやま。或あるは。漏かれ。ついで。後のちより。ついでる。あ
得える。あられが。今の編へんの後のちは。附つ。これ。り。彼書かのしよを

著^{あつら}ぶ^りの^りづ^つと^と誰^{たれ}も^も告^つげ^ん。告^つげ^んの^りあ^らざ^るを^あら^ざり^ぬ。
ゆ^つり^るの^り幸^{あつ}ら^るの^りね^ら。ふ^の書^きも^もさ^らに^にあ^らざ^るを^あら^ざり^ぬ。
文化^{ぶん}化^{くわ}入^い幸^{あつ}未^み仲^{ちゆう}種^{しゆう}ゆ^つの^り夜^や。月^{つき}光^ひと^と著^{あつ}他^た堂^{だう}の^り
西^{さい}廂^{しやう}引^ひて^て校^{けう}一^{いつ}と^とり^つ。

簞笠漁隱

京雜の記前集卷上

薩土

瀧澤解編集

新堀山

日暮^{ひぐり}の^り里^{さと}ハ^は江戸^{えど}名^な所^{じよ}記^き全部^{ぜんぶ}七^{しち}卷^{くわん}寛^{かん}文^{ぶん}卷^{くわん}一^{いつ}第十^{じゅう}八^{はち}條^{じょう}小^{せう}新^{しん}堀^{くわ}村^{むら}と
出^いせり^り又^{また}江戸^{えど}古^こ鹿^か子^こ 元禄四年九月の印本 紫^{むらさき}一^{いつ}本^{ほん} 天和三年 本^{ほん} 又^{また}新^{しん}堀^{くわ}と
あ^らざ^るに^に日^ひ暮^{ぐり}里^{さと}と^と書^かけ^る一^{いつ}但^た紫^{むらさき}一^{いつ}本^{ほん}の上^{うへ}卷^{くわん}新^{しん}堀^{くわ}の^り條^{じょう}
編^{へん}者^{しや}の^り自^{みづか}ら^か所^{じよ}の^り者^{しや}今^{いま}ハ^は日^ひ暮^{ぐり}里^{さと}と^とい^いふ^ふの^りか^かは^は天^{てん}和^わの^りこ^こ
を^を日^ひ暮^{ぐり}里^{さと}と^と書^かけ^るも^もあ^あら^らず^ず新^{しん}堀^{くわ}日^ひ暮^{ぐり}里^{さと}主^{しゆ}訓^{くん}相^{あひ}似^ひえ^え
か^かく^くい^いその^の文^{ぶん}字^じ稍^{しやう}倍^{ばい}さ^さる^るゆ^ゆに^にみ^みけ^けは^はあ^あら^らず^ず訓^{くん}は^は唱^{なう}と
日^ひ暮^{ぐり}の^り里^{さと}と^とい^いふ^ふも^もあ^あら^らず^ず今^{いま}倍^{ばい}ハ^は里^{さと}の^り字^じ紙^し有^あり^りて^て日^ひ暮^{ぐり}と

のと唱るもありかくてハ舊名の新堀の義は稱ぶ上野下野を
 え素上毛野下毛野なり中葉より毛字取略されり毛ハ
 草なり彼処ハ郊原山澤多くていと草畑死地方る是ガ上毛野
 下毛野と呼せりる國々の名二字に定りて上野下野と書ふ
 至てゆる月毛の字取略せり唱る
和名類聚抄 上毛色乃唱を
 國郡の都考に
 者ざるゆゑ今なるは古意を失はざればらよ由ても日暮里ハ
 月と比しとのと唱るハ有略よする取たるべしとれがみ新くさ
 新堀るるを後日暮里と書うんてりり月と比しの里と唱ふこハ
 けテ終のてとるるをハ江氣の懸舟松の碑銘ハ山曰道灌里曰日
 暮可以徴と書まはるハ別よ考る所ある歟とるは日暮里

青雲寺の上るる山は今倍ハ道灌山と唱ふめまてと後もふるハ
 新堀山とりり江戸摠鹿子近宝四年三月刊卷一山の都ハ新堀山と
 谷中のうらうらあり色又道灌の舊跡あるりりり山中ハ
 諏訪権現の宮あり云々今按じると新堀と日暮里と唱ふは
 ころ好事のりの道灌のり取えたりりり新堀山ハ道灌山と
 つひハ赤紫一草ハ道灌山の谷中感應寺のじろ七面院の
 山とらるる城山の工ハ岩淵といふ所ハ江戸より定附への乃ハ
 そこハ常勝寺といふ寺あり乃乃灌の善提所也又小日向令別のこと
 といふ寺ハ乃灌の清教あり道灌山より東少然んまハ限らる
 云々といふ乃灌山々天和以東の稱呼歟とるハ揚ふるんえん

或の八件の道灌六持資入道のるに於て関道灌といふ所の
 此より知るるごとしありしづき由證文を引ざれば徴とあるごとし
 又西窪も道灌山といふあり江戸惣鹿子巻つ山の部は窪
 山の西のつづみあり持資入道の舊跡といふ山上小指の
 壳倉あり又山の鎮守とぞ云ふとと紫一本大塚の跡は
 收めく道灌塚と出せり僅は二三里を隔て道灌といふ山二ツ
 あるはんきば好むるりの附會せしありぬ疑ふ所
 予をめてこそとていづれも徴とあるは是らば
 いぬ己己の年ありあり日暮里ある依性院といふ寺の
 庭よんことありてごまのおん歌を石よ彫て立より此下

予彼如よ推ひつるまよりてこそとていふれが

中とるく嘆とく花のうげふとくは月とくは里をたつ及

後一位資一とかせありありあがま人の需ふ應むるより調書あり

いとたうといとめは江戸あてか歌塚のいもいんさるあり

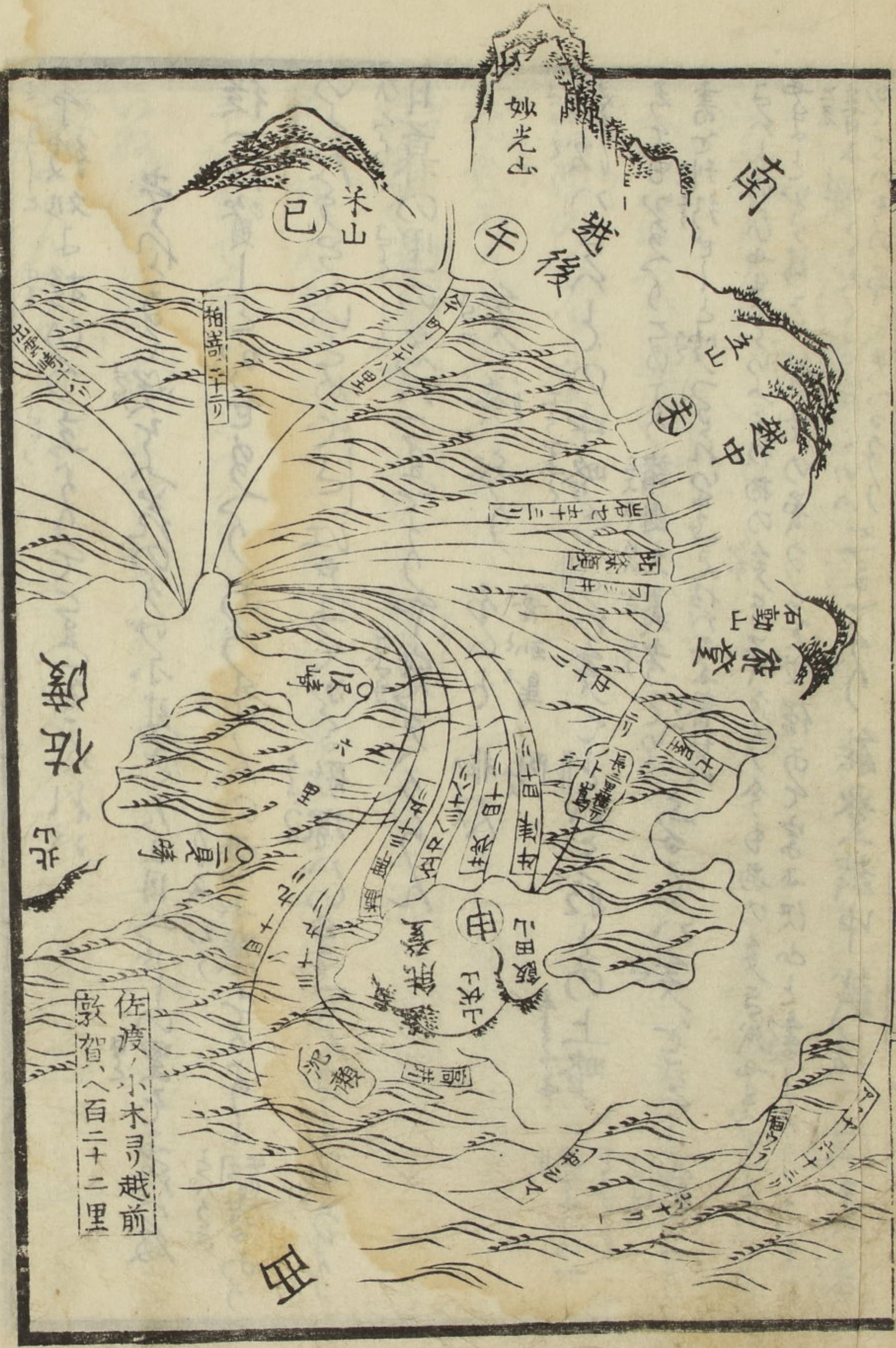
日暮の里の名のこまよりや定むらん

多湊ぶり 石いと 非人 附

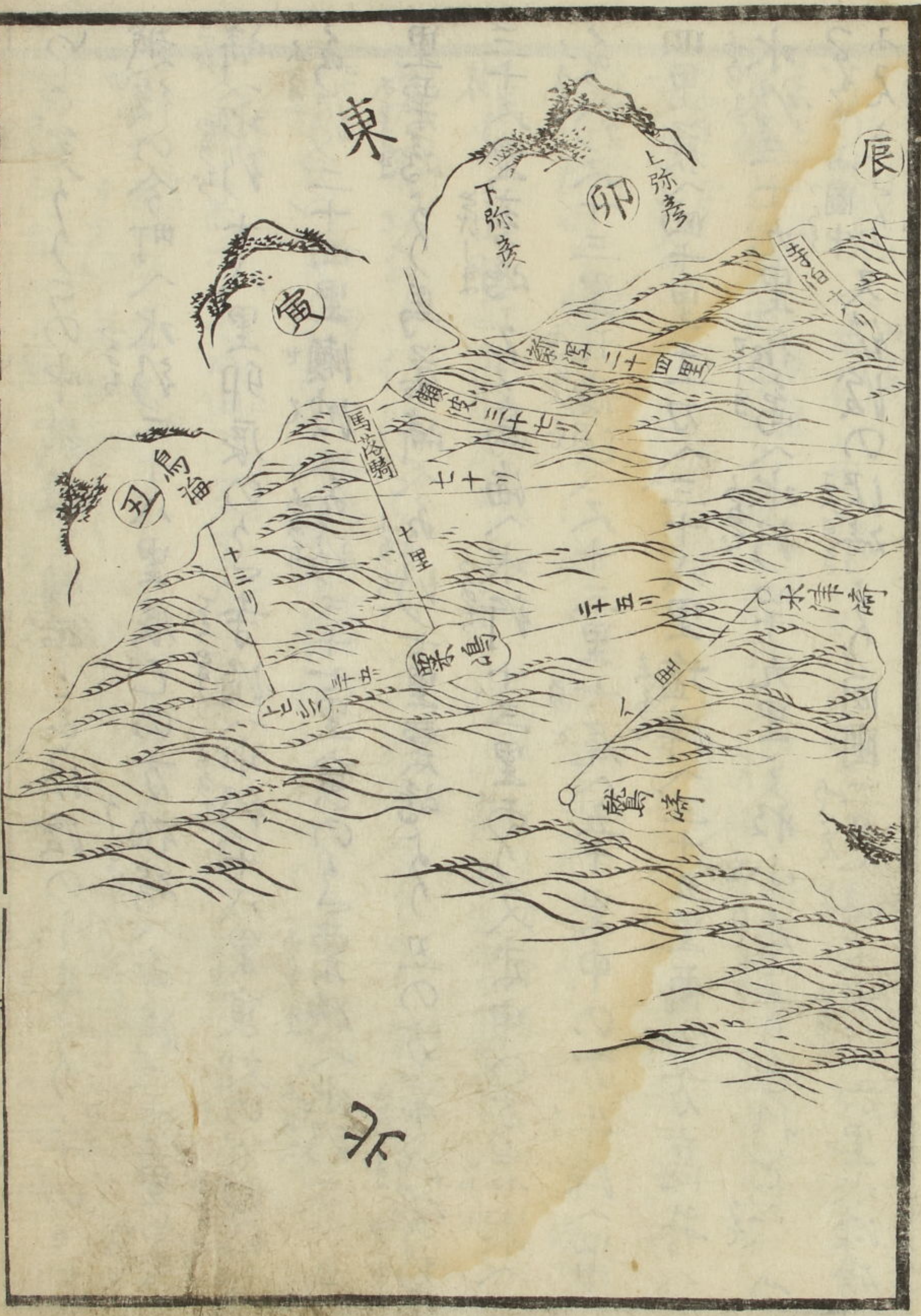
佐後のさくとの中略とさか多こといふねとの上略

きてゆかありこの下 諸國念義考といふ ありくハ多とと刻

書と刊行せしとてつられしむんは不費せは 今由ある多と紙中よくといふ
 こととのひやまといふに後物の多と義あり今由ある多と紙中よくといふ
 事よとくう移く懸妻の義ありと世俗あて字ふ沢山と書しよりいふ
 音ふ喝とくなくいふことより能登越中越後へ流るる湊



佐渡、小木弓越前、敦賀、八百二十二里



〆と多うりの中越後と順路とを佐波の小本より午のりこ
 越後の今町へ水行二十八里辰巳の方柏崎へ水行二十二里出雲
 崎(水行)十八里卯辰のり寺泊(水行)十八里寅卯の方新庄へ
 水行二十四里瀬波へ水行三十七里寅卯の方粟津へ水行二十五
 里粟津より馬落崎へ水行七里粟津より丑の方喜崎へ水行
 三十二里喜崎より鳥海へ水行十三里あり又未申の方岩瀬へ
 水行三十三里北條頭へ又十三里七尾へ五十里申の方牛津へ四十
 四里上萩へ四十里立刀へ三十八里塩津へ三十五里酉の方高井へ
 水行三十九里和島へ水行四十九里之れ小本よりこれを記す
 つづくふ圖中 又佐波の沢崎より同國二見崎へ水行六里水津崎

〆と多うりの中越後と順路とを佐波の小本より午のりこ
 越後の今町へ水行二十八里辰巳の方柏崎へ水行二十二里出雲
 崎(水行)十八里卯辰のり寺泊(水行)十八里寅卯の方新庄へ
 水行二十四里瀬波へ水行三十七里寅卯の方粟津へ水行二十五
 里粟津より馬落崎へ水行七里粟津より丑の方喜崎へ水行
 三十二里喜崎より鳥海へ水行十三里あり又未申の方岩瀬へ
 水行三十三里北條頭へ又十三里七尾へ五十里申の方牛津へ四十
 四里上萩へ四十里立刀へ三十八里塩津へ三十五里酉の方高井へ
 水行三十九里和島へ水行四十九里之れ小本よりこれを記す
 つづくふ圖中 又佐波の沢崎より同國二見崎へ水行六里水津崎

るる月由こまよ準つてまゑ

解按まゐる小内海府外海府共
加茂郡は屬を願村と鷲崎の間と

ハニキ野
とりの

同書よ云佐波の海上は巖をさうするあり赤松をうへ
生さく蓬萊の鳴臺とりのめたるゆくもありいと
大さなる巖奇妙の崖をさうするありとて目とまじり
ぬるも後ふの飽らちと唐画の山水なるやうな地をえてまじり
たる景色ありあり山踏をゆく小險に阪ひとりありとて
今の平地よ出る款とまふふさうして又高坂ありまじり
果れば又そが上よる阪ありこのまじり代郷の人の路は退屈て
疲勞るこ甚く海は西北の果はまじり自波のまじり

まじり土俗うさだつと唄ふ風あり日あり必ありうさだつと
烈風激浪甚くまじりあり人えむ只浪の青百千の霹靂
の落るまじり小地ほえていとまじり地震と死ハ春くまじり
まじり魂をいへまじりまじりまじりまじりまじり
たるまじり金氣よまじり
佐波まじりとまじりまじり荒磯るまじり物あり
まじりまじりの制度小衆のいと重きをまじり配流せざる由
ありまじり
聖武天皇の天平十四年壬午冬十月十七日成子河邊
臣東女と佐波の團人流を正四位下塩焼王が及洋の
まじりまじりまじりまじりまじりまじりまじりまじり
佐波の團人流を中臣朝臣良麻呂私に盛まを謀るまじりまじり
天皇の安和二年己巳夏四月藤原干時作干晴の二子に佐波の團人流を
左衛門高明公と同意するまじりまじりまじりまじりまじりまじり
鳥羽天皇の天仁元年戊子

春二月源朝臣義綱と佐治國へ流すと舎那義元と強られて平実の
 罪とゆふべし。○後白河天皇の保元元年丙子夏五月十五日盛則
 入及と佐治國へ流すと新院隨從の武士とふりて。○高倉天皇
 の安元二年甲午冬十二月晦日山本兵衛尉義経と佐治國へ流すと
 治兼元年丁酉夏六月二日新到官資仍と佐治國へ流すと平家と
 かひひんとせし。○順徳天皇の建暦二年壬申夏六月八日
 侍達四郎某依佐治國へ流すと获生右馬允と開解の罪より。○北條時
 兼久三年辛巳夏六月廿二日順徳天皇と佐治國へ流すと平家と
 取あり。○龜山天皇の文永八年辛未冬十月廿八日僧日蓮と佐治國
 へ流すと宗門建立の罪より。○後宇多天皇の弘安四年辛巳秋
 七月二日佐々木時亮と佐治國へ流すと。○伏見天皇の永仁元年
 癸巳夏四月平左衛門尉宗綱と佐治國へ流すと宗徳と頼綱入道果圓
 が長男あり又と赤坂沼安房判官と相謀りて北條貞時を殺す
 りと告げしより。○永仁六年戊戌春二月冷泉院入及
 為兼卿と佐治國へ流すと北條貞時が死あり。○後醍醐天皇
 の正中元年甲子春二月七日權中納言資朝々を佐治國へ流すと
 北條高時が所領あり。○文禄の年より。○文禄の年より。○文禄の年より

そめくぐつとめぞとれ鳴峯とありつ且泰平淳化の
 時よりあるよりけまば人のとれあり波風とあり
 和して文の道よとれ入りの彼知よと多うととん志れ
 ともありてける母幸と活業とありたり常彼知の風俗と
 粗記とる物図せに漁獲とる村民に耕種の暇毎に薪を
 伐てて庭臥坐草履草鞋台より織り蓑笠を縫ひ石を敷
 木板挽竹細工ともあり或ハ索を編ひ葛根と掘り山籠ともあり
 あり塩と焼も有り日僱ふ出海水乞の飛来ともあり
 種々の南物ともあり婦女子ハ本綿を織り草を刺織
 柴火樵炭茶と摘もあり姫津の女子ハ糸織繰り漁業を



大丸
 都立の
 女見車
 園を人の洗を
 穿く持はさく
 ころせま地
 廣に限る
 女もわかく世を
 女子も多かやこれ
 犯る罪あまわたり地
 生さあひると生れゆ
 のこわわれし
 被は草のつれさねと
 日か身あはて
 者うへ何さきとさ
 永を若くむれはらる安く
 むさしむこれ只さう
 白粉の紅粉
 白粉の紅粉
 白粉の紅粉

白粉の紅粉
 白粉の紅粉
 白粉の紅粉



柳屋
 柳屋
 柳屋

絢あやひみ湊みなと町の女子めのことの日ひ僮じょうと挿さ了りょう及あままとひとくよ旅りょ客かくのこ行李りやうぎ
 漆し狭さ管くわん合が羽う籠ろうと擔あみまとるんおのをを賤せん婦ふのの二十にじゅう三さん采さい女にょよよるるをを
 扇あ紙し割わりとと髪かみととめめぐぐ只ただ押おつつろろくくのの紅べ脂あ紅あ粉うをを
 施あすす灰はい櫛し并なら等ら結むすててろろりり帶おびああつつろろりり常あ平ひらととろろりりのの灰はい櫛し
 稀まああのの披ひささるるゆゆめめのの女め子のことももととささくく薪たとと成なり形かたちとと擔あ置おをを脊せ負あひ
 野の蔬の魚ぎょ額がくとと擔あひひてて賣うりり又また海う濱べるる女め子のことのの男お子のこと
 ちちのの小せう綱こう引ひとと業ごうとと市いち中ちゆうのの女め子のこともも準まててちちのの常あ平ひらととろろりりのの灰はい櫛し
 袴はかま巻まきき或あるハハ神かみ社やのの祭まつり祀ひらのの日ひ或あるハハ担お山さん瓶びん水みづののととれれ袋ふくろのの帽ぼうし子こと
 細こくく西さいとと額がくよりより頂うへへくくけけててちちのの戴かぶ帽ぼうし子このの紫むら小こ限かぎりりももあありり
 むむとと灰はい黒くろぬぬれれもも白しろききももああるるべべ衣い裳さののううるるべべ紅べ花はなとと水みづ添そひひ

ちちのの糸いと綿わたととろろりりままぬぬとと二ふた布ふゆゆららままじじよよおおねねしし但ただ舊ふる家いえ
 と茶ちや店てんのの二ふた布ふのの白しろととろろりり又また賤せん婦ふののたたれれ織おりととろろりりのの狐きつね袴はかまととろろりり
 又またちちのの袴はかまととろろりりのの紙かみ布ふりりてて縫ぬいいてて着きるるゆゆめめののたたれれ織おりととろろりり
 おおろろ江え戸こああくくつつ中なれれのの脱ぬ捨すてるる本ほん綿わたののつつままままぬぬとと李り州しゅうへ
 和わ積せきあありりてて送おくりり身みをを買かひひててちちのの用ようととししととさされれ草くさととろろりり彼か
 さされれ草くさととちちのの草くさととりりててひひとと編あむむつつ道みち服ふくのの如ごとくくあありりてて常あめ
 着きるるちちのの袴はかま今いま紙かみりりてて古ふるとと推お量りやうるる承う久きうのの擾う乱らん正せい中ちゆうの
 苛か法ぽう萬まん民みんのの又また母ぼととくくかかるる荒あ磯いそ下げ遷うつされれももいい槐かゐ門もんのの貴き族しゆく
 とくとくててううれれ鳩と空らよよ身みととりりつつ生なてて華は洛らくへへるるももああらら次つぎ旅りょ魂こん護ご
 家いよよ落おちちののひひららんんとと痛いたままととああららどどやや當あ時ときのの分ぶん野のおおりりしし

カズ

解再按くわいたるふされ草くさハ刺草さしくさありて移ハ胸着むねぎを記しるす
 草くさと草摘くさむしりの草くさ乃すなはち如ごとく
 相川あひ川の人ひと平夏海たいげのうみ曩なふ予よも諾うなてりらく佐後さごありて乞こ問もんせ
 ホイトとのふ之こ古こ老ら傳つててり兼あ久く三さん年ねんの夏なつ 順徳じゆんとく天皇てんかう
 平州へいしゆへ送くわされしむしとれみや去い人のちくみりてく為なる
 海うみありて嗟さ来らいの食くも辞げきしりバ漁翁りしゆう山妻さんさいこれと憐あはれさる
 ありてきりて乞こ問もんせとホイトといふホイトハ布衣ふい徒との表あひと
 解按かいあんたるふこれ牽強附會けんきやうぶくわいの言ことあり信まんじとては
 ホイトといふ乞こ問もんせといふ佐後さごハ限かぎる云いふ今いまも中ちゆう山さん道だう
 及およ紀路きじろあり乞こ問もんせとホイトといふ高野山たかのやまハ杜鵑とくわんの啼ない後あととて

本の節ふし究きゆうありてふむがしり居ゐてや寒さむくある時ときハ乃すなはち動うごり伏ふ解かい由よし
 乞こ問もんせと不ふ思し議ぎするといふちとてを崔さいのホイトといふといふ
 乞こ問もんせの崔さいの為ためハ食客じやくかくといふこととてを醫い生せい和わ國こく氏しといふ
 一いつ周しゆう回かい次じ筆ふでふりて又また按あんたるふ江戸えどありて囉ら新しんとてちとて
 二ふたハチはちハホイトといふが如ごとくハとホと通とほりチとトと通とほり江戸
 三さん比ひ比ひ丘かみ尾びの乞こ問もんせとて人の門かどに立たてられ必かならずはアといふ
 四よ上野うじのハ西にしありてハほうといふといふハイといふ袴はかま兼あはれ入いれりといふ
 五ごハとホと通とほりバホイトといふハ坊ぼう下げとて終はる
 六ろく園いんの近ちか属じやく四方しやう廻まわりといふ紙し園えんせといふと愛あいされ考かうふり

そが中ひみん小らん非人らんといふらん濫觴らんなりとて三代實録せんごうを引らんて云らん有らん勅らん
 賜らん非人らん逸勢男らん龍らん叙實山らん等らん本姓らん總入京らん云々らん是時らん非人らん
 といふらん濫觴らんなりとてらん本刑らんの人らんと非人らんといふらんよりその人らん孫らん迄らんを
 非人らんといふらん今の非人らんといふらんのらんのらんを勅らんありて賜らんとらん云々らん
 ことに我らんて考證らんの一らんはらん傳らんのらんのらんことらんのらんことらんのらんことらん
 實録らんは所謂らん非人らん逸勢らんの非人らん罪字らんのらん悞らんなりらん印行らんのらんとらん多らん
 四らんを脱らんせりらん力のらんありとてらん印字らんのらん三代實録らんのらん後らん文特らんふらん多らん
 悞字らんも又らん女らんのらん所らん補任らんありとてその條らん許らん多らん漏らんしらんうらんこれ
 善本らんを獲らんどらんて刊行らんしらんこれらんがらんむらんしらん犯人らんを非人らんといふらんと
 外らん子らん及らんばらんさらんるらんことらん文德實録らんありらん
嘉祥三年六月 壬辰乃條下 流人橋

朝臣逸勢あそんとありとて今らんのらん非人らんへ人らんよらんあらんららんとらんいらんふらんなり
 あららんとらん非らん當らん作らん悲らん彼らん等らん元らん素らん悲らん回らん院らん垣らん外らん乃らん徒らんるらんまらんば
 悲人らんといふらんなり

佐賀國さか雜太郡さか相川の鎮守さかを善知鳥ぜんち大明神だいめいじんと号ごうはらん
 神かみのらん春日かすかひのらん両社りやう同所どう相並あひりらんまらんせらんぬらんとらんをらん相川あいののらん三社さんと
 稱せうせりらん土俗つちのらん説せつふらん善知鳥ぜんちのらん神社じんハらん周景王しゆけいのらんおらんんらん女によとらんおらんおらんと
 二につつ録りく起き其その怪かい法ぽうのらん六む女によ熟じゆくなりらん異朝いのらん公主こうしゆをらん祀まつるらんあり
 ともらんのらん神かみのらん妻つま日ひをらんたらんららんはらん志しとらんてらんまらんるらんのらん理りありらんやらんおらんありらん
 神かみをらん定さだめらんるらん孫まご善知鳥ぜんちハらん出崎でさきといふらんがらんどらん陸奥りくおの方かた言こと丹
 海濱うみの出崎でさきさうらんといふらん外濱そとありらん水みづもらん小こ嘴すねハらんたらんくらんてらん眼め下した

やぶ
鳥

善知鳥

羽ハ青豆色
ありよの毛
ひらきわた
はやありて
頸のくま
くま



腹の毛尻のくま
白くあり足尻の
左右より尾を
甚短

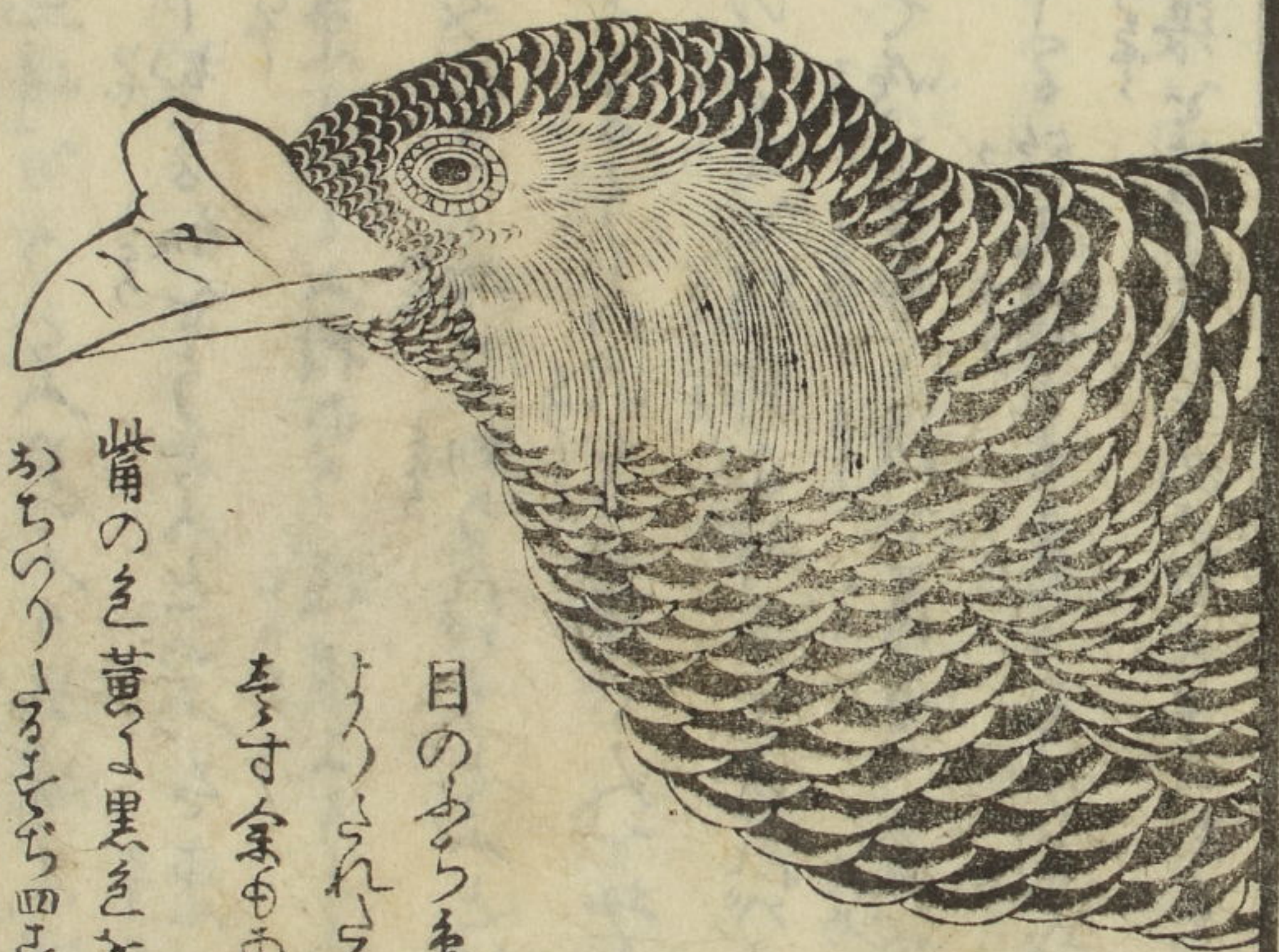
足青く

裏のくま

水尻の

くま

くま



目のくま赤けあり目の下
よりくま毛白く長
くま

嘴の色黄く黒色を帯より核
おちのりくまより四よりくまより
肉つたのくまよりして鶏冠

肉つれの如高くおるあり故よされをもうとよとつ彼
 鳥の嘴は喩て出崎をうとよとつ出崎よ比て彼をとうとせ
 つ飲何よまけんこおる如をうとよといふと東國の方言あり
 義濃の市嶽驛の東よとみ村あり依濃よとみ阪ありいま
 鳥頭と書ふとよとつ女ねとつやる如るべうとよといふあづーさ
 うとよと善知鳥と書うふけを甚く人をやそれ又よその
 友を愛せりその一隻を捕師は捕るよあれがゆきをそ乃
 ほとり紙翹めづつて鳴と甚く涙を落とる所の如とるんあよ
 善智の二字は當よる飲又鵲とも書うその善詳もは予量よ
 善知鳥の寫真一張と獲りたる鳥の圖と大く違ふもの大サ
 善知鳥の寫真一張と獲りたる鳥の圖と大く違ふもの大サ

おとつれんよよとつ獲りたる鳥の圖と大く違ふもの大サ
 小鴨に類して羽をうん黒きなり羽の及ぶて雉子鶴といふ
 りの如くう嘴の太くして前尖り横小如此隔らぬ如
 りてよとつ如く嘴よりつづれと眼下部肉つれの示すこ
 出るがその色赤の薄紅とよの黄黒色を帯りたる哉よ
 すこく細くやうされども大よ同ドかば眼下部は白毛棄て替の
 如く足ふ多揃ありて腹のよと白く水色の足は大き後へ
 よりてはくりのるれどこのもつたてその足賢小ありと
 尾よと短し今つたよよとつた圖を舊説よ善知鳥の親を
 うとよといふは如くやうといふといふ一書よけも砂中に於て

順徳天皇佐はへ遷されさせめひいと死たぐれん真野といふ
 里みどりしちれそのら八幡うらむせめふとまんま井と八幡
 の二里むら隔てその間中越の松原あり一冬そらむら
 森といふその里より河製八幡は河坐せ射よまをふと
 つらふら皇子とてら生させめひいと後子神は祝ひ
 まつて一宮二宮三宮と稱し今も母在中あり八幡より
 北よりりて和泉といふ所へ 順徳帝河在世の時の河科
 所よりりて祝ひはあつて河科ありと名いふせ
 めひと迹ことらふ芝とあるとあり今この辺りくま
 中兵衛といふ農夫の宿所よりぬ又六尺は九尺あり

ろつと憂え石ありとの如の地ぬむらより 件の石を
 鎮守と稱して祝ひまつれりり 怪くそのりりを様と
 とあれが園宅の男女忽地眼病を患ふといふ今も母あり
 又彼も兵衛が地境南のうら新九郎といふ農夫ありこれか
 園圃の中み空地ありて堂所と名いふははるる也 園圃の中
 して一宇の堂を建てるめひ一庭の靈佛を置せめひ
 堂の傍ら松の梢に龍燈のあがりて我今も母龍燈
 松と名いふ彼堂は僅に舊趾を存せれども今も母松の
 あり又龍燈もよりくのかりて彼松はかふとぞ又 中
 宿願の旨よりまつて和泉の四隅は本佛四庭をまつせめひ

和泉より四里をくろ東に梅津といふ村ありて小真法院真言宗
 との寺ありてその寺の庭に一株の老梅ありて昔梅と名けり
 傳てのふむり 順徳天皇けところより幸ありしとたりのせ
 むひ梅の枝と土中へさせむひが枝紫どしくは繁りり
 五百餘年の後までも春毎は花さけりその樹の幹の四尺
 あまりのむべ四方石垣とさりり幹の半まで青纏とて
 包るが如くいと厚く葺むれば幹ももんえむ葺より上
 るる枝の四方ふひて花全はぬより花と白く又房紅あり
 梢の花のうらみころ昔の中とさくみ茶をまてころよのら
 葺は花さくが如くよりてこそを葺梅と名く又二見村あり

農家の庭に老梅あり名けりて鶯宿梅といふ花を八重に
 匂ひ窶く高くその梅もさる帝の植させむひといふ
 但條本は異なることと花一輪も實を必三ツ四ツをまねり
 頗奇とさる代處よりその穂を乞て接木あり或は
 實極むとんとさるのあきどもさえて花をた栄るまほし
 帝の植させむひといふと誣るくら次若梅石
 佐は風土後祀若梅石
 小見えきりり
 嘗て地圖を按むる小真野山の西へ入江ありて尾内川を
 川國府川石田川等そのまがれとれ越の海へ入るその
 邊と憲が浦といふ 順徳天皇の所記に云む

とぞこの荒磯よつらせまひくつらく華活と意く
 おぼめさんくまじぶ戀が浦といふやあん
 うり浪ふさんちたのかまの何もうあ。又海へたがを
 落しめひく海せもうり。東のつるも牙をさみさうや
 おのひふちの底もさやあらんこれの時の沖製
 るるも里老の口碑も傳くより抑あめ帝の文の道み
 長もいくまうも歌をうめあがうりさせおん怪
 ぢとつども時の不ふあめあひて意と波瀾は標
 屍と荆棘ふ包もはひささくは衣人や彼を思んや
 らよ且く輪回の理ぬめて鏡とれと義時 三皇と遠き

鳴へ遷奉より八代武家の執権より朝憲を
 次よとまうれお高時先例まうと
 隠岐國へ遷りまうりつらつらどもあう族滅せむ成敗
 の時を得るとはつらつらあり時をゆるとれと拙策もある
 るのあり時を失へば智謀もはなれとる時が智の徳を
 あつたてたてたてて我時備とはくまうり
 佐波の方言も風と東より吹と山瀬といふ辰のかさう
 吹をよとといふ己より吹をうらとらふ南とさうまうり
 吹をうらと申より吹をひる酒と真西成より吹を下西
 より吹をたが北の正夏より吹をあひ寅より吹を中のあ

いよとをよとをる歌

郊まの山ま瀬せ辰ちだだ己こううちち午まふふりり未みころろささんん申まひひるる風かぜ

酉う真ま西せい戌しゆまま志しもも西せい亥がいふふ風かぜ少せうのの真ま丑しうのの寅えんのの申まのの母ぼ

ああのの條じょう方ほう言げんいいととままううりり ○ 露つゆ草くさととめめくくままりり 花はなとといいふふ

○ 肥こ佳け麥むぎととととろろててんん花はなとといいふふ ○ 苜せうととををいいふふとといいふふ

○ 苜せう糸いとりりととととちちとといいふふ 江戸あまのりふたふと ○ 土つち官くわんのの女によ明あきとと

美み人びととといいふふ又またいいふふとといいふふ いひも美人の又またああらら糸いととといいふふ あふ

婦むすめとといいふふ ○ 愛あい子ことと勸かん子ことといいふふ 勸子と其草なりあまう育そだちちとといいふふ

○ 夜よ具ぐとといいふふ かんごう移人やとあまらちやちやそとといひいとを今按するよ ○ 夜よ具ぐとといいふふ

中なかつつつとといいふふ ねんやハ藤ようり ○ 石いし斑まだら魚ういとと四よ十じふとといいふふ あひなめ 魚ういとと四よ十じふとといいふふ 四十此云 鮫しやう魚うい

商人あひりのうりとと四よ十じふ物ぶつ商しょうとといいふふ 四十物此云 ○ 魚ういとと四よ十じふとといいふふ 魚はめの字は藤と唱あまらちやちやちや 赤あか目め

○ 魚ういとと四よ十じふとといいふふ 黒目めくろとあめめたるひひあまらちやちや ○ 魚ういとと四よ十じふとといいふふ あつらめ底あつらめこつらり ○ 氷こほりとといいふふ あつらめ底あつらめこつらり ○ 氷こほりとといいふふ

○ 氷こほりとといいふふ あつらめ底あつらめこつらり ○ 氷こほりとといいふふ あつらめ底あつらめこつらり ○ 氷こほりとといいふふ

○ 氷こほりとといいふふ あつらめ底あつらめこつらり ○ 氷こほりとといいふふ あつらめ底あつらめこつらり ○ 氷こほりとといいふふ

○ 氷こほりとといいふふ あつらめ底あつらめこつらり ○ 氷こほりとといいふふ あつらめ底あつらめこつらり ○ 氷こほりとといいふふ

○ 氷こほりとといいふふ あつらめ底あつらめこつらり ○ 氷こほりとといいふふ あつらめ底あつらめこつらり ○ 氷こほりとといいふふ

○ 氷こほりとといいふふ あつらめ底あつらめこつらり ○ 氷こほりとといいふふ あつらめ底あつらめこつらり ○ 氷こほりとといいふふ

○ 氷こほりとといいふふ あつらめ底あつらめこつらり ○ 氷こほりとといいふふ あつらめ底あつらめこつらり ○ 氷こほりとといいふふ

○ 氷こほりとといいふふ あつらめ底あつらめこつらり ○ 氷こほりとといいふふ あつらめ底あつらめこつらり ○ 氷こほりとといいふふ

○ 氷こほりとといいふふ あつらめ底あつらめこつらり ○ 氷こほりとといいふふ あつらめ底あつらめこつらり ○ 氷こほりとといいふふ

今按... 八世の... 〇 蝦の歌る... 小本溪舟

内洞外洞の... 方言ある... 〇 海松 〇 海柳

〇 海馬... 〇 龍宮... 〇 蔓

〇 蝦の守り... 〇 針千本... 〇 巨葭

追考 和名鈔 和名布 久岡北 乏則怒 乏則腹 脹浮出 水上者 也 此等 俗乃 老不さ えずく ものこ

〇 蝦の守り... 〇 針千本... 〇 巨葭

石伏ハ 難る 和名鈔 小難音 夷和名 伊師布 乏性伏 沈在石 問者也

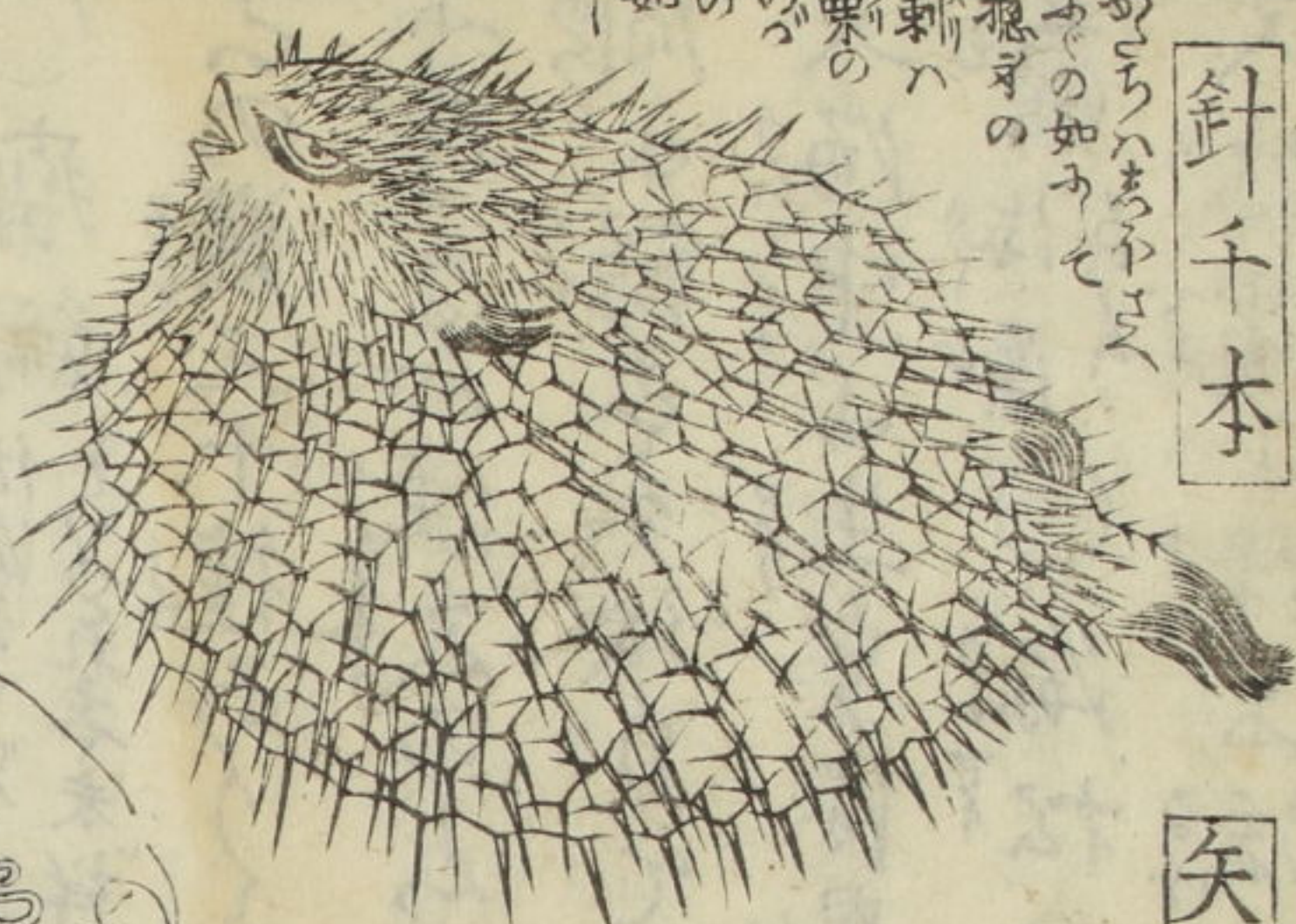
〇 蝦の守り... 〇 針千本... 〇 巨葭

〇 海馬... 〇 龍宮... 〇 蔓

〇 海松 〇 海柳... 〇 蔓

針千本

如の如く
刺の如く
穂の如く



矢根石

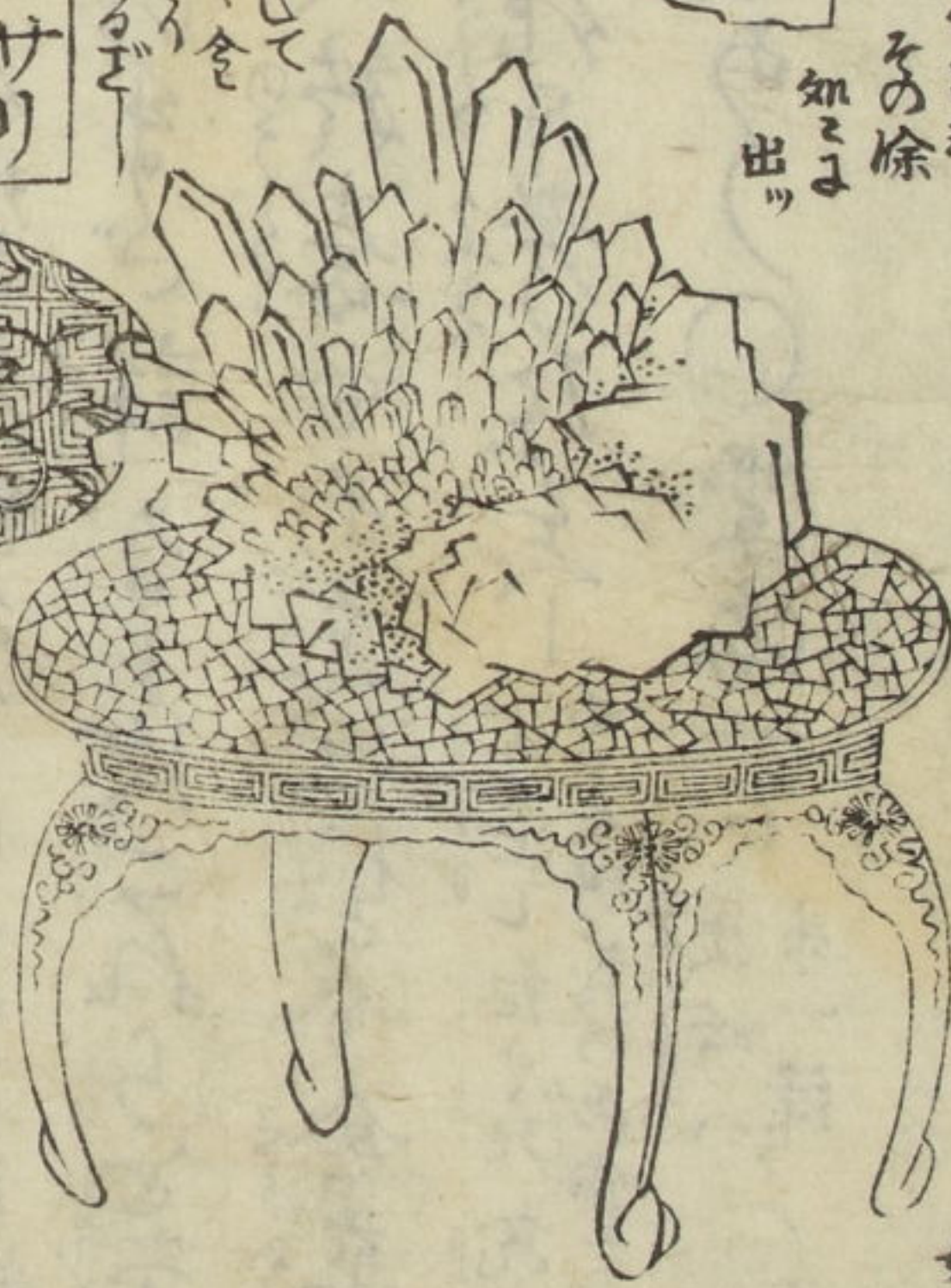
佐渡より
出羽
その除
知こ
出

白石英

白きと水晶の
如く

銅ツサリ

△石のまきかして
さしこみ
さしこみ
さしこみ



カニツカ

蟹のぬけ
つらつら
アヒ

鮫ノ守

モツマ
海藻の類
紋その色
節の如く
つら
抹茶
ふか



竹相フツ

雷芥石

本ハ洋
萌黄
末ハ
白
あり
雷芥
石ハ
種類
マ

赤玉石

その色内ハ赤
外ハカ
いろ

黒豆石

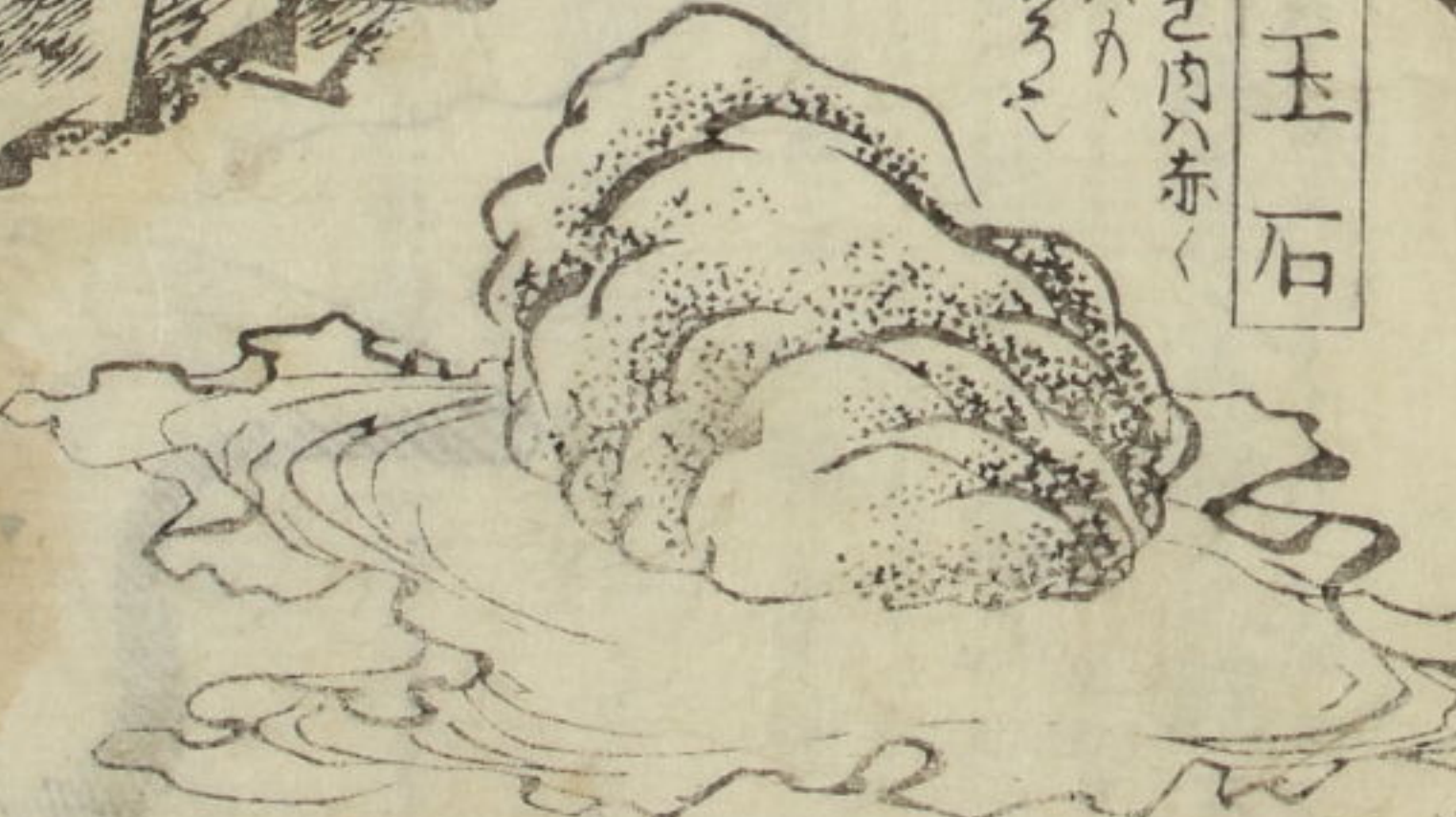
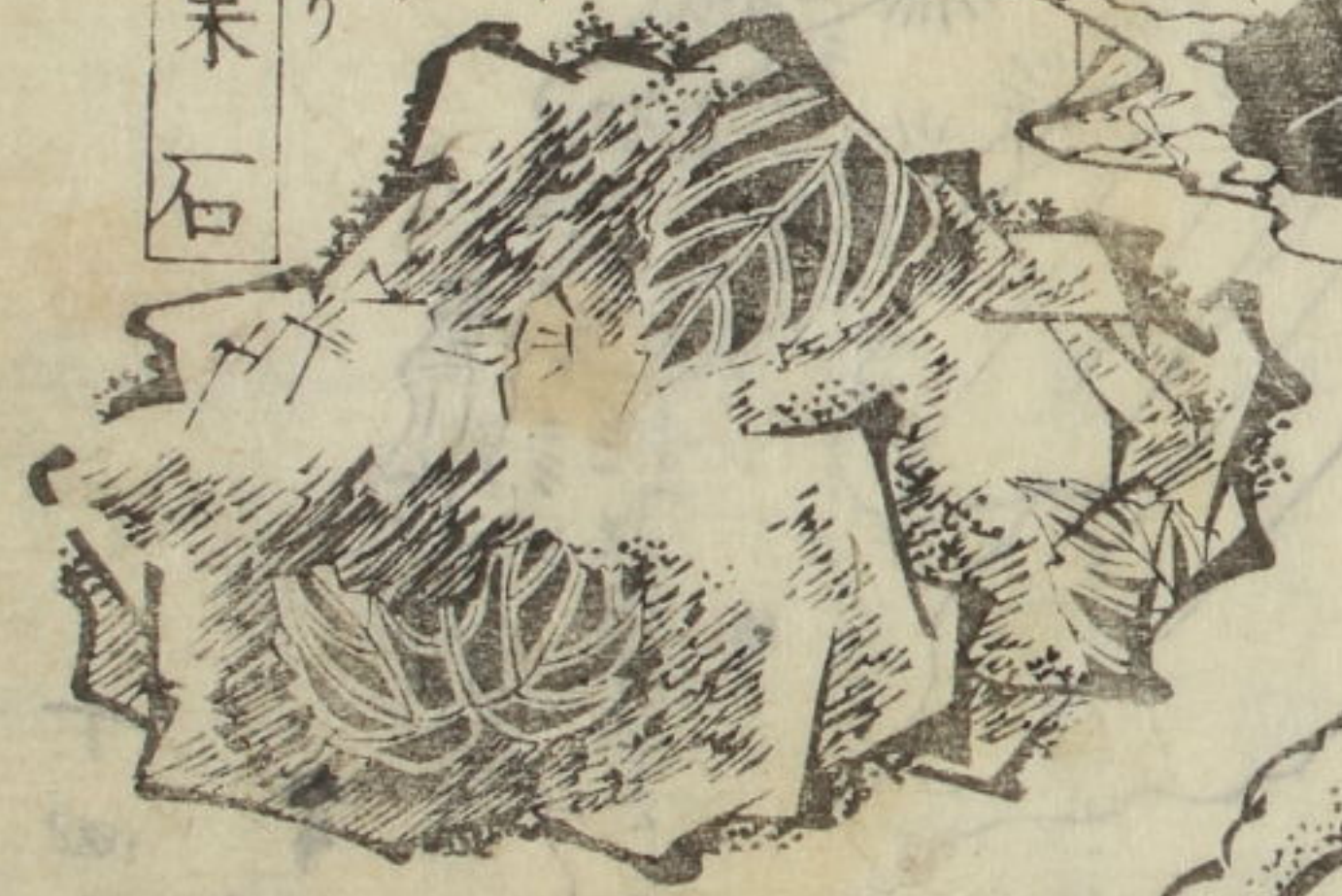
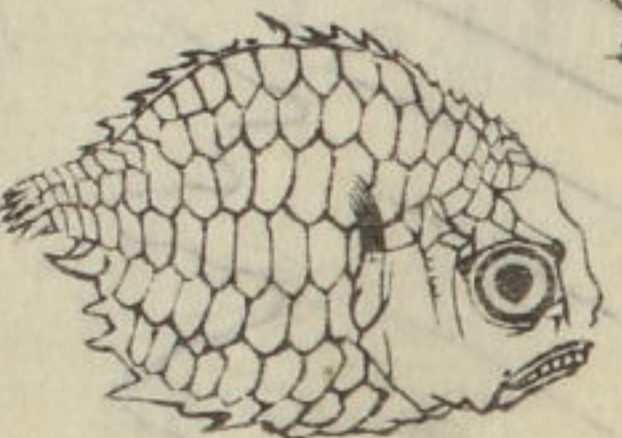
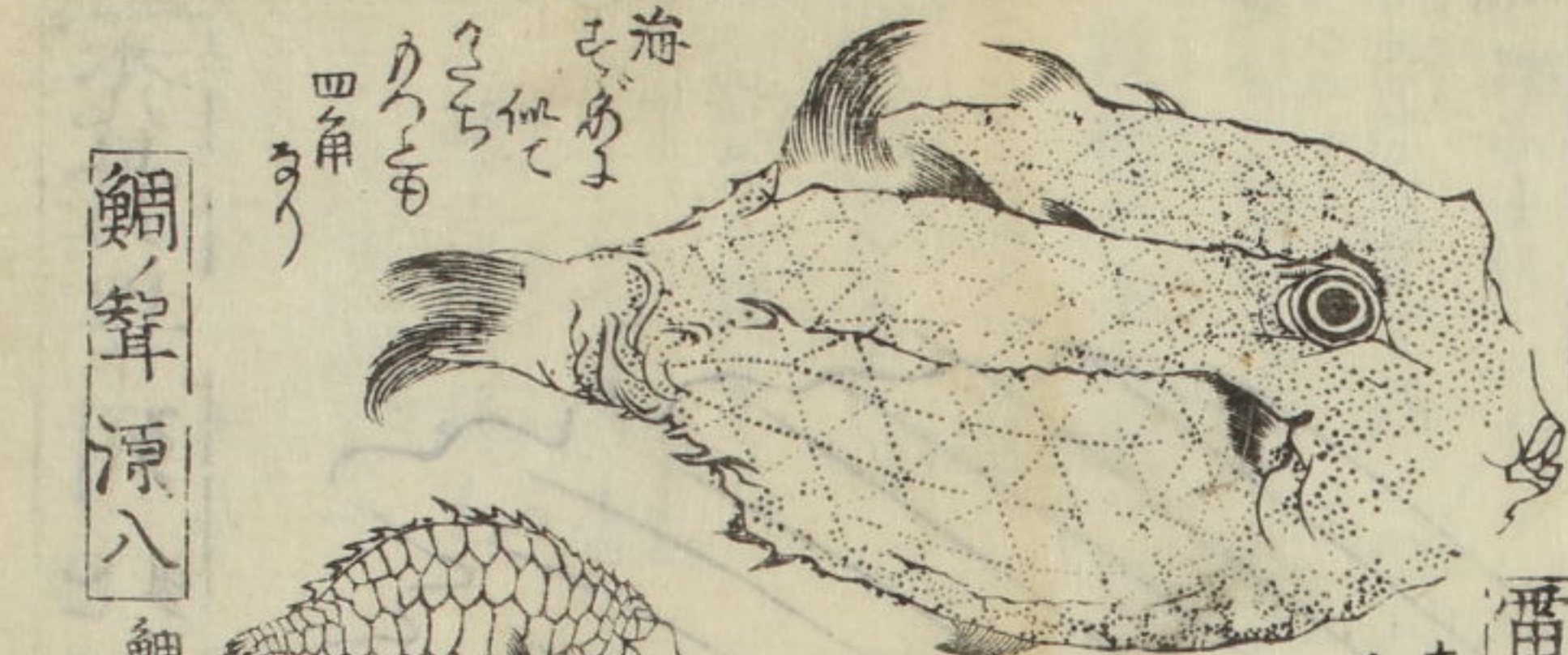
その色
つら
つら

鯛ノ聲源八

鯛ノ如く
極めてらひま

木葉石

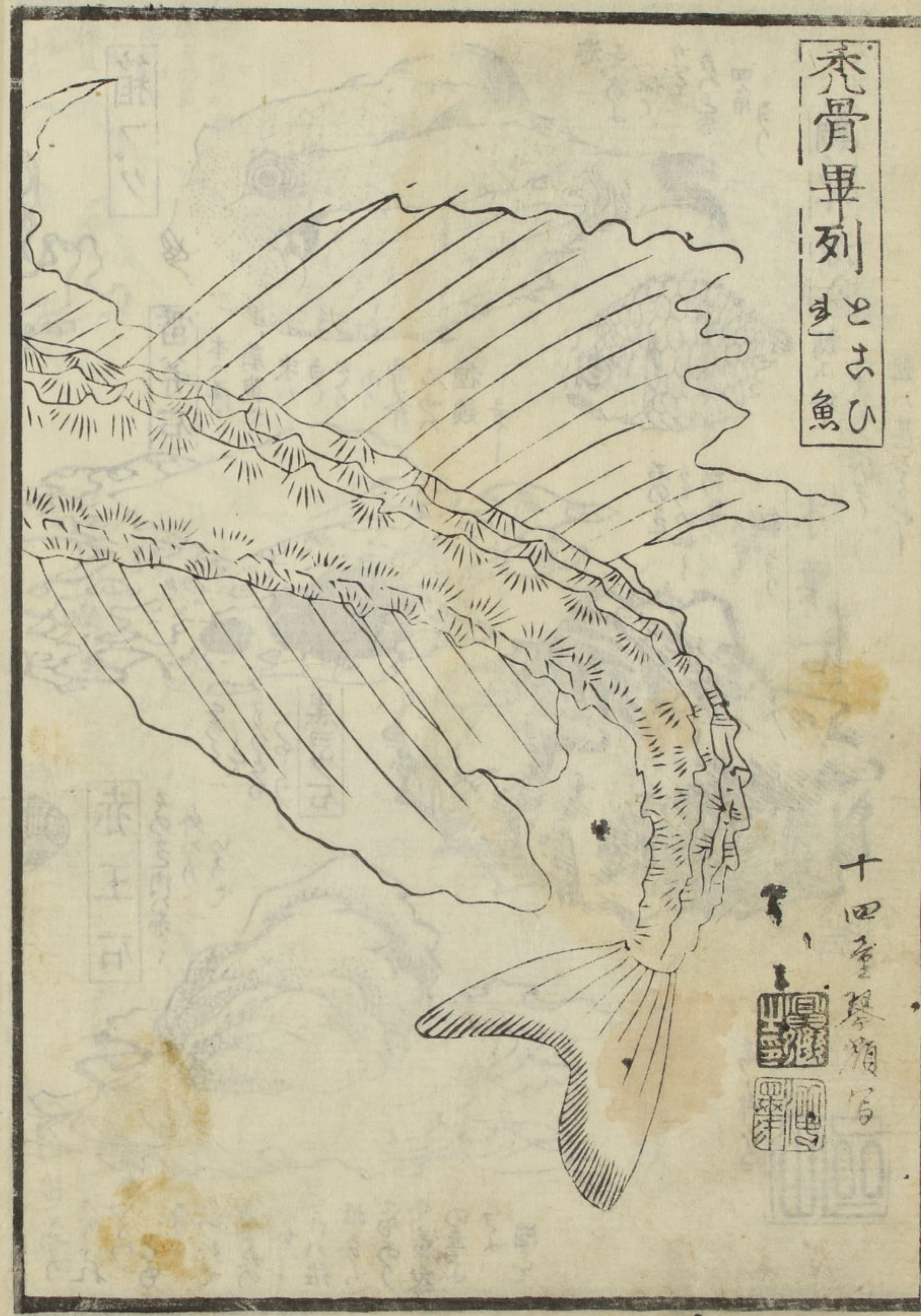
石の色
くらの如く
朽葉の
鱗ハ甚ぞど



浪より
なれ
とも
つれて
蓮花の
如く
これハ佐
波あり
今童蒙
の為子
とて
圖と



秃骨畢列 とよひ
魚



十四重琴願官
印

解按 とよひ
方言 とよひ

長蛇魚の類也

又説鱈の類也

較の符 とよひ

目の黄 とよひ

脊 とよひ

色 とよひ

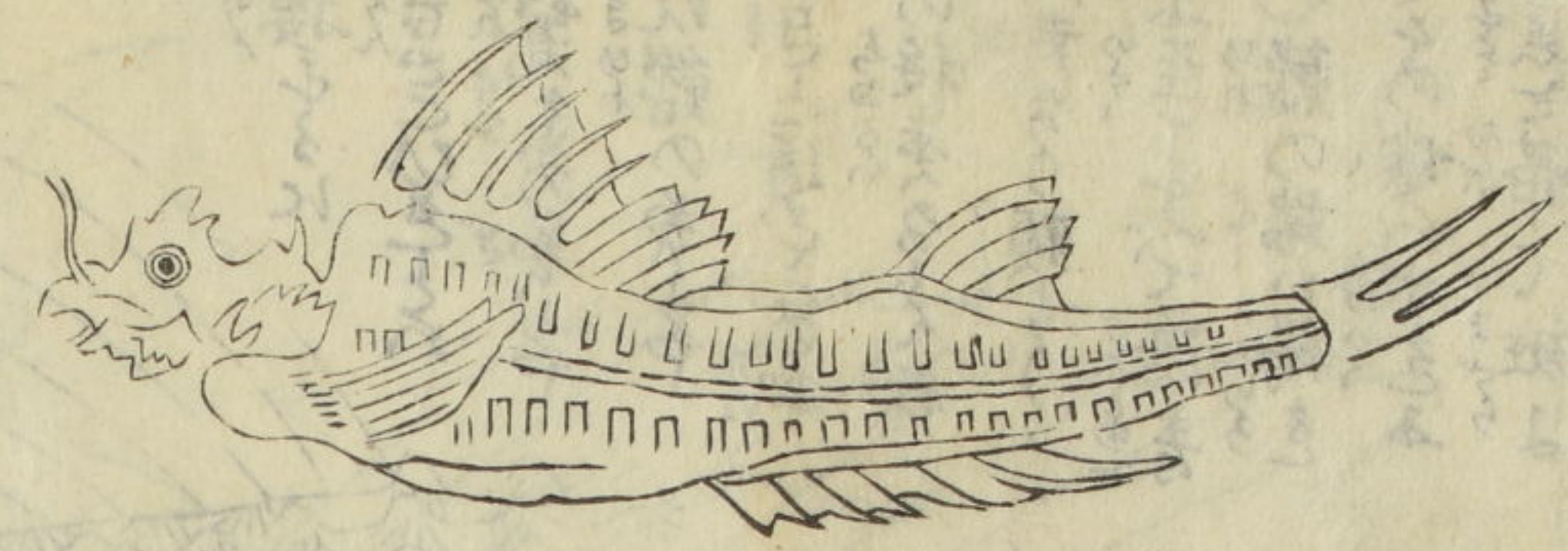
海黒 とよひ

魚類考

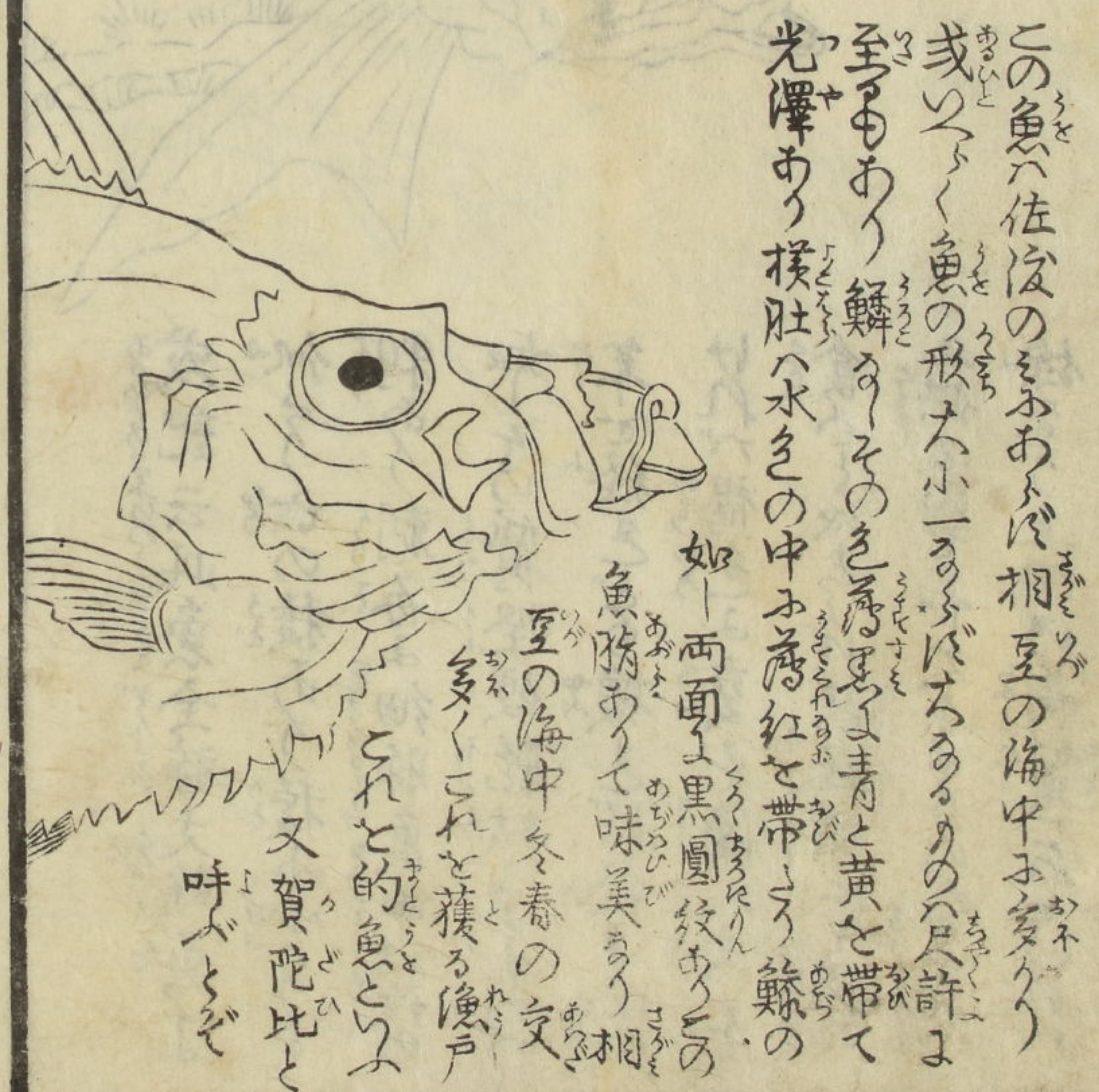
或記云此魚全群文鱈魚より
似たり六の稜あり稜小なる
刺あり刺毎に細脈龜甲此紋の
如その質堅硬乾枯するもの六
年を経ても壞まじり経るに
ければ褐色よまど漁人肉を
食ふと彼者よび只乾腊して玩物
小供るもの長丈ありの長尺
餘あり上下の長鱈これをひげ
兩傘の如化魚と名するはといふ

魚類考

龍宮の鶏



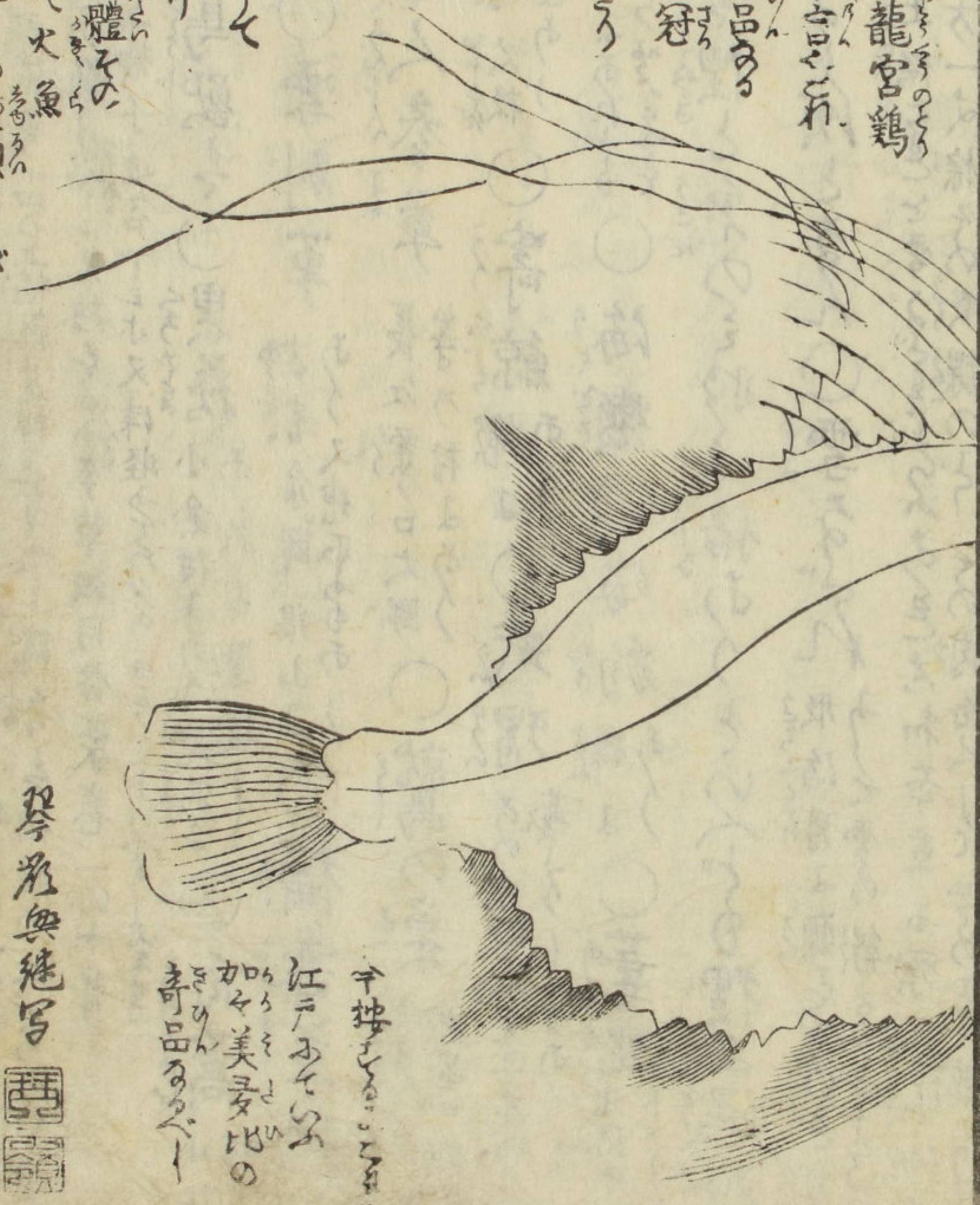
鉦敲魚



この魚ハ佐波のそおあふ相豆の海中多々あり
或はく魚の形大小一なるがばあるりの尺許よ
至るあり鱗のその色青と黄と帯て
光澤あり横肚ハ水色の中ハ赤と帯て鱗の

如一面ハ黒圓紋あり
魚膂ありて味美なり相
豆の海中冬春の交
多くこれと獲る漁戸
これと的魚とり
又賀陀比と
呼ぶとぞ

或のつらく龍宮鶏
と六佐波の方言これ
鬼頭魚の奇品あり
力のありひま冠
あつて鶏は似たり
横肚ハ小あり
方長高起て
刻鏤る如
乾枯し
力のハ堅硬して
海馬に似たり
今按とるハ全體その
色赤紅やと火魚
の如し実よをこの種類るるべし



干坤とる
江戸あそいふ
如々美夏比の
奇品るるべし

琴花無絶写



○椰子 今按草木部藻玉一名藤椰子一名猪腰子之物重国不生本草綱目

啓蒙卷十四の上極藤子の條下と考へ一椀舟と相換の仁とありて

鯉の鳥帽子の類あり又按草木部細目啓蒙卷一の十背

椰子の條下小椰子通名ヤシホ又津経と云々ウヨシトのり足と云

又兔奔鳥獸と○黒猪 小倉村あり

○自蒿 小川村及

西三河村 ○雪割草 方言未詳浪山は

○福壽草 小川村及

の辺特小 ○人參草 長江粟口大野

○就鳥の巢 二見北嶺

○寄鯨 稀あり

○玳瑁 稀あり

○海獺 ○海豹 稀あり

○葦鹿 北海の俗

○山獸と狸と兔のまじり 格あり

○雪ふぐれ 形海月と類と云々

○赤玉村 ○赤

又佐波十七日と稱する奇石あり

○石鍾乳 戸地村

○温石 北嶺

○砥石 新穂村

○蒲萄石 内海府

○黒曜石 和泉村

○燧石 土佐せんべん石といふ又さあが

又土産の藥草二十四種あり 猪く搦と六十三種又十種

あも乃びべしやうて廿四種より限るあり

あは孫せむ但李州の黃連極めて佳あよきくこれを
嚮く細幸由又よくとよ

つねる年依信の相川る夏海子た訪生し孫親

彼知の風土をさう又さらで由孫より先達の記いおれ

する書どもひと海を二巻藏ればあきらよりあきり

つづか海らるる考え姑くたれもあるたりあ九半が

一色あれど後の人亦續とありてこの足さる奴補を

故よりおのが福がいりや

麻娘々

痘鬼のみの曩ふ愛石雜志ふ哉つあうんちあかりい漏せ

このあんどてよ速七年たうりさこれの春あくと童るホの
痘と病とありたり去の年の夏五月ワが宅より二三十
歩東のかま住いする僱主の婦有一日昼寐志する忽地
小覺そその隣の人母物とらうつら奴後お受け彼婦乃
つらくさても奇しれ愛とさうれいつらより妹あやも
あは孫と六十あまうらるる媪のふらびよりる青茶席の布を
とるさうつとむらひある長生ぬの門より入るあがり框あ
尻をうけ茶紙をう喫とあやを三度あうて退生よりりさ
左う右ある耳房の門をさう張さうとよ生ぬの背門より
へらんさうとあがうく躊躇いなくあは後あうそあはんと

ひろくところ北の巷紙さしてゆくるとさふ折商人の鳴び声お
 覚えんあれたらた愛あるんや口のほき愛あるんやと同し
 台さるゆれのけのけりてまねあざさ笑ひあけりかろく彼
 長生が女児痘瘡をやらついとわらうあつて酒湯といふの
 そくだかくるろ又その妹痘瘡あて臥さうさそ季ある男児
 さへかひふみね恙なく肥えらぬ又と生が孫女年十二はあ
 中でのりことと患む今茲とこの痘のこよまう約まぬれど
 祖又も祖母もつらくとおひおたりたりにあらむい由又
 のぐれふたりかくてぞんまね曩は僮夫が婦のゆえんさうと
 ついつる媪と世よふ痘瘡神あるととややくは曉じが

与生が孫女とらるひとあありて年十五の春孫生のう孫
 痘瘡いつとわらくまどと果つらあの時もさうとんま那
 されたのりまどといひおく媪が茶碗をて三つびれを喫う
 ちの長生が三つりのむとえんら痘瘡かむべさ象ありた
 又と生が背門を張つてと後ふとをすまるといひよと
 たぐらむとま彼孫女のためさかむかえんよ世よ痘瘡神と
 ついののさうま後と疑ひありとていつとわがぬくのさう
 けりこの怪談よ味まどもすか親く観りて笑もあつた
 草亦子小鬼の氣ありとつり物あれば必執あり
 既よ世よこの病あれば彼鬼ありとも誣うけまどあつと決んか

降よあつばつからろ鬼神と来たるの怪は是れ多きが相識なる
坊賈の叔母齡又十よあまれどもいつまご瘡を病ごとてこゝろ
あつこれと懼るるを瘡の流るる年あ六村にて必遠くも
生ご瘡るとれとその瘡は瘡鬼と闘ふことありその艱苦
いづべうもあつばつれども勝負ありこれを憂へよおのひ
母そらつその怪甲ふらつ吾儕の瘡は瘡瘡神は肩る
こあつばつ彼病ふて死んといふ甲叮嚀を推て諭せども
諾むつらつが甲又こゝろと憂ひつ近ごろとろく療治を
請ふ医師ちつたつらつにありらつが竊よあれと相謀る
有一日彼醫師を叔母よつらつるや世よ瘡を病ごらる

かのあり正月一日と八月十五日に生きたる男女二人の
おろそこの両辰は生きたりの生涯瘡を病ごらる病といふも
極てつらつと方書ふんえらつ口は年未れを驗るは実よ古人の
説のごとと真しやふいひつらつらつこの老女八月十日まで
生きたりて今その説を夢てあつこゝろ紙信り且飲びて
怪甲よ告甲る何志らぬおのらつらつをさく醫師を稱め
けは年未れの狐疑頓お解て瘡をおろつらつとありらつら
あければ夜まらつらつやと寝て瘡お神とたつらつら
今よ至るそこの老女瘡を病ごらる由又隨つらつら
るのりとぞ

夢小冥土

十の夢より三とせよ此の春予爰は冥府より拵びてこのけり
けり覺てそのより紙書ぞめ破麓の底は移りたりしと今茲の
夏紙魚を拂ふとくもつらうく撈り出せりよりてもつらう
繕寫して世の童子等よ示すの癡人面前爰を不説
これ又秘して何あるせん

寛政十一年己未春三月十七日このゆへ予夢は冥府より
拵べつ覺ての後も記憶せり一片は鹿で春を滅却と峯の
白雲晴ちながら愁を拂ふ山下風のやみおどるがむけに
空も霞こめて世の春あがらこめりわりの河をたぬもがれと

よみお亡友某甲忽然と来りり予の中にて予は曩に
予よりりのひぬと夢するに今訪るるとは縁得がごとくつら
友やあると同が友のいつくその事不待りりある冥府に赦
の目るれば吾們と多く拵れを許さるごめり黄泉の光氣は
えせちめりせんといふ予遠くこれと共よゆく程予前程
いつそたたくそ紙志らば又終る東西と志らば遂は忽ち地
友は後まきくち居くらち惑ひゆかり山を踰水を涉り
ゆたきてえん久まば道次小官舎あり門前不遂布をこ
たる上坐は媼ひとりみづとぐもせりちりくする隨はこれと
えんは荊婦が養母會田氏あり

外姑は寛政七年
四月廿九日

むろの事と同しゆなり一日暮りのとらひしき苦
 るひたるも今由らうありて申すは親胞兄弟の
 その面影よよもなき祖父母母よよあひまは縁の
 えかつたさうひあんとぞんば今さうあつてくす
 外姑お對つてつら親胞兄弟の何知よよあるあり
 中とり外姑茶をさのり容易かた度とりどもありとぞ
 ありてたづねよ路を間違ありとて町寧申指南せられ
 かく外姑は辞しつれひいとさるに数十町ありと隣
 忽地は暗くありて日のさし下りて時小前面は物あり
 ゆりて五ありと叫びてが宵やうらち發ざやのぐら

その声と郷導はくわたりてさへんは身長六尺あり
 あるともどろくしれた盲法師が嚮ふ事歎引まねたせ
 うつ俯小躰と見え汝何の為か陽人を伴ひまゐる今り
 さまを急やせが必地府の制度と乱らんぞいつとむと
 罵ら打懲とぞありたりと痛くさありの多氣積
 うり申けり度さあては罔竊とるは忽地袂を引のあり
 りり發つてん久まき外姑の声をひくめさようらば
 汝速よ海へり帰らざれば女まなく苦をうけん
 して苦むらん善報よあつてさうとつてさうきり
 つまご親胞兄弟小環會をまらばさようむりくめ

遺憾^{のころ}とていふ^{ころ}もあはれ^{ころ}ど^{ころ}何^{ころ}もす^{ころ}ま^{ころ}て又^{ころ}外^{ころ}姑^{ころ}お
 道^{みち}す^まと^ま舊^{ふる}来^{きた}一^{いつ}路^ぢく^くつ^つる^ると^と之^{これ}が^が爰^{こゝ}さ^さめ^めた^た狗^{いぬ}と^と鐘^{かね}の^のま^まち^ち
 發^はぎ^ぎて^てひ^ひや^やり^りあ^ある^る汗^{あせ}衣^{いぬ}の^のう^うら^らぬ^ぬを^を身^みに^にた^たり^りや^やり^りく^くい^い
 つ^つき^きよ^よく^くて^て枕^{まくら}み^みか^かく^く鐘^{かね}声^{こゑ}と^と儂^{ゆる}ま^まが^が曉^{あけ}る^るま^まち^ちに^にい^いま^ま
 佛^{ぶつ}字^じせ^せん^んが^が佛^{ぶつ}鏡^{かみ}の^の香^かた^たを^をま^まら^らば^ばの^のま^まは^は浮^う屠^と家^けは^は婿^{むこ}
 ても^もあ^あれ^れよ^よつ^つる^るれ^れが^があ^ある^る爰^{こゝ}と^とみ^みう^うけ^けん^んと^とあ^あま^まは^は去^こ年^{ねん}の^の
 八^や月^{げつ}十^{じゅう}二^に日^{にち}家^け見^みあ^あく^くか^かり^りの^のま^まひ^ひと^とう^う年^{ねん}と^と改^かま^まで^でも^も袖^{そで}み^み
 お^おく^くあ^あい^いま^まご^ご乾^かど^どま^まご^ご時^{とき}ま^まら^らぬ^ぬ雪^{ゆき}霜^{しも}の^の既^{すで}も^も海^{うみ}を^をあ^あら^ら
 ぐ^ぐか^かる^る歎^{なげ}ま^まの^のま^まご^ごと^とい^いて^て今^{いま}の^の爰^{こゝ}と^とむ^むと^とま^まる^るも^もい^いう^う
 小^せ野^の皇^みの^の生^なま^まが^がら^ら冥^{めい}府^ふは^はあ^あれ^れう^うひ^ひま^まひ^ひさ^さる^る公^{こう}生^{せい}窟^{くつ}乃^の

日^ひ藏^{ざう}の^の燠^{あつ}熱^{ねつ}地^ち獄^{ごく}と^とい^いふ^ふま^まひ^ひと^とる^るその^{その}事^{こと}妄^{まが}誕^たふ^ふち^ちう^うと^と
 之^{これ}ども^{ども}爰^{こゝ}と^とい^いう^う纏^{まと}ら^らら^らば^ばら^らみ^みよ^より^りて^て日^ひれ^れの^の信^{しん}じ^じ自^じ民^{みん}が^が
 三^{さん}夢^む記^き寓^う言^{げん}ふ^ふあ^あら^らば^ば干^{かん}時^じ己^こ未^み暮^ぼ春^{しゅん}十^{じゅう}九^く日^{にち}家^け庭^{てい}を^を詳^{しょう}
 えて^て自^じ記^き一^{いつ}記^きの^の日^{にち}の^の祖^そ又^{また}の^の亡^な日^{にち}あり^り
 自^じ評^{ひやう}と^とく^く人^{ひと}の^の爰^{こゝ}の^の神^{かみ}と^と物^{もの}と^と交^まる^るた^たあ^あら^らば^ば乃^{すなは}ち^ち魂^{たま}と^と物^{もの}と^と
 接^まる^るま^まり^り目^め次^じ用^{よう}け^けが^が陽^{やう}と^とあ^あり^りて^て魂^{たま}の^の位^ゐは^は居^ゐる^るに^に月^{げつ}次^じ
 閉^とま^まが^が陰^{いん}と^とあ^あり^りて^て魂^{たま}の^の位^ゐを^を離^{はな}る^る則^{すなは}ち^ち時^{とき}あ^あり^りて^て物^{もの}と^と接^まる^る
 かる^るま^まは^は寝^ねて^ての^の爰^{こゝ}生^{せい}ご^ご神^{かみ}ハ^ハ則^{すなは}ち^ち中^{ちゆう}み^み處^{ちよ}て^て將^{しょう}帥^{すい}の^の如^{ごと}く^く一^{いつ}身^{みん}の^の
 主^{しゆ}と^と考^{かう}ら^らる^る中^{ちゆう}臣^{しん}の^の後^ご離^りき^きて^てま^まら^ら外^{がい}よ^よと^とあ^あら^らば^ば死^しを^をか^かは^は
 め^める^る了^{りやう}方^{ほう}術^{じゆつ}家^けの^の神^{かみ}と^と出^いて^てあ^あら^らば^ばの^の生^{せい}も^も死^しも^もか^から^らず^ず如^{ごと}く^く一^{いつ}子^し

奔物論南郭子其慕隱几而坐仰レ之則レ然也レ然也レ也
 夫而レ噓レ嗒レ焉レ似レ喪レ其耦レ云云
 若夫化レして二とあり三五とありてさるは彼皆よく動靜
 ことりのありとこれの別又純皆神あるんあらば或は魂と
 魄と并レたり間形と煉レり生と養レへ正初て成レとありて
 返るるにあらば別死と出て滞るるにあらと死と病又
 驗レなり故より夢の乃魂と物と接るあり況夢之事
 皓首頽年とらどもいも嘗みぐらうりて老るとせむ
 凡磨る所多く少壯時のこと亦驗べし蓋夢の少陽の氣
 するべし以上宋の王達が説ふ事唐の成式が酉陽雜俎
 云李鉉が李子正辨ふり至精の夢の別夢中の身レ

人んて劉幽求が妻をみるかこれの夢中の身レ別夢の
 夢の一事なりて推べしは愚者の夢少く一人は至る間
 のまの夢は驕息百夕一夢なり卷八の十二又按レるる酉陽
 雜俎卷貝編は地獄一百三十六三角の生死の事と無記とて
 とらうるありて録る所青出死地獄黒繩地獄號叫
 地獄焦熱地獄八寒地獄の蓋佛説は地獄の數一百三十
 六とあるもの天一地六の數ありん又十八地獄の説ある由
 三六十八陰の數あり宋の王達が云釋氏は十八地獄の説
 あり人口は膾炙するところ其義いも詳るるは然れども
 然氏は六根六入三毒の分あり六根も眼耳鼻舌身意は

縁六入と之聲香味觸法は因る皆三毒貪嗔癡の悪業
 ありあよ三六共ふ十八の教と成る又九地ありてこれを両小
 とれば亦其十八の教あり右小児輩の爲に引とらるるの文悉
 國字に寫を文を味んとするが
 源奉とすれば佛説の只理のそ姑虚実を問ざん
 照ざし

魚化石

風流とありて友り結ぶ梭江主人鰯の頭の石は化せり
 魚を請て二魚あるふ未嘗有の奇品ありこれをえんが
 魚既ありたまを敲げ果して石あり主人のよるんあ
 石と筑後柳川某家よ獲り彼家の傳承詳ありと
 つくども思らくん雲根志ふ裁る所の田尻氏の奇珍

せれりのあまべーこれ曩ふ米え草が嗜欲不待際と
 只管奇石を聚んと多ひと志を費し辛くして石を
 獲りり紀固より雲根志ふ所見あれば十餘年前有一年田尻
 氏へ消息してある石を今由弄藏せりやと問はせしに今
 ありと答たりたまあつらばらの魚化石の雲根志ふ裁り
 所の物とありとありい決めり巻懐食鏡ふ志久知の
 狸呼と朱口といり同青鰯の條下と考ふる江鮓由洲走と
 同物のやふあるたまど九州あての別種とを方言ふ江鮓
 赤目屋須美朱口黒目ギチヤウボラといふとぞ町燻は
 話傳せり予獲がうたの物を愛するよあねども造化の夏

魚頭正面

梭江主人云
筑後柳川君山が

柳川近御

茶々といふ所の

御士田尻宗助

といふ魚頭の

石を化せし状

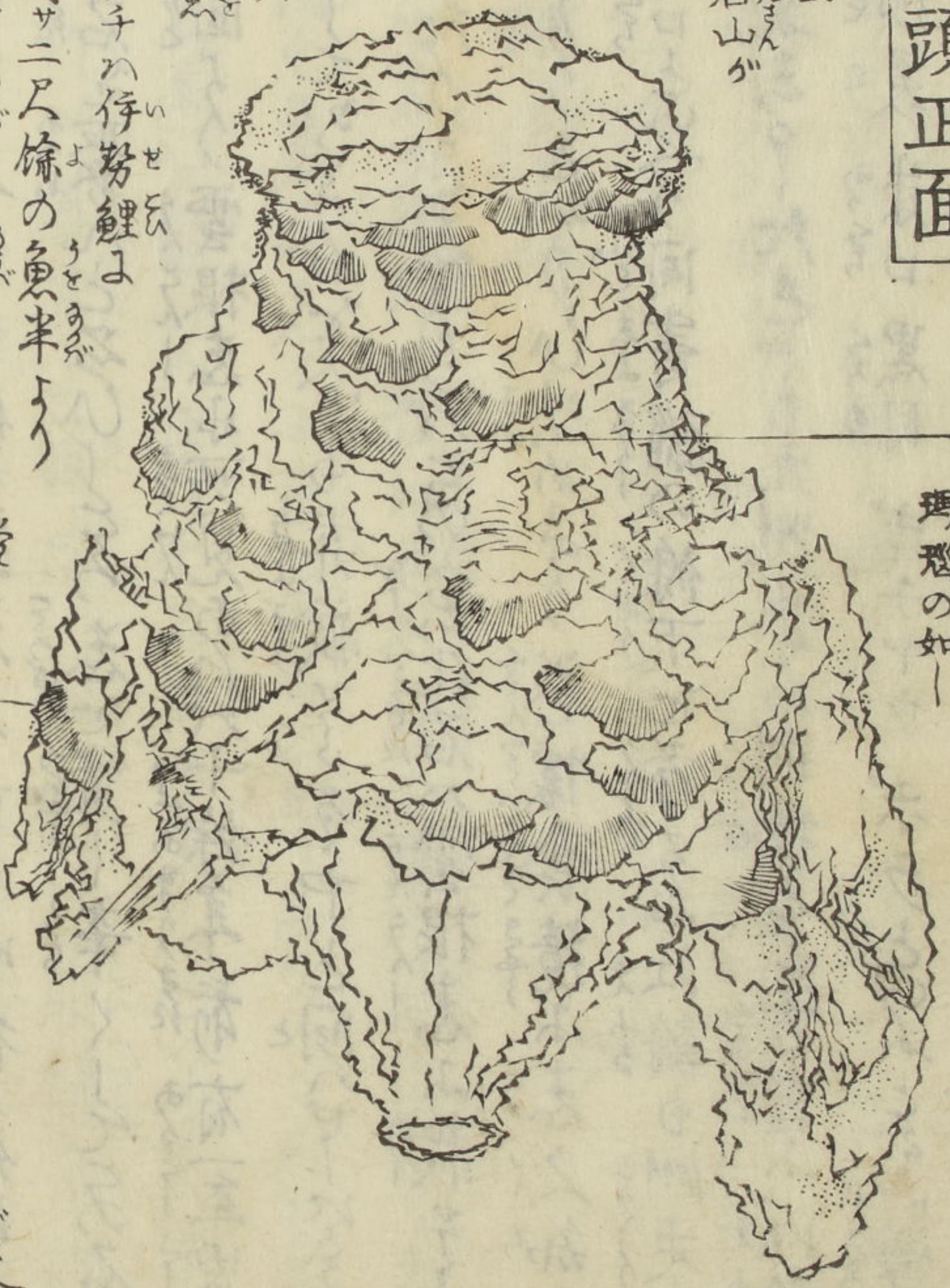
を此迄あり

ニクチといふ魚

ありとぞニクチの仔細

似たる魚は二尺餘の魚半より

尾の方の朽失て米より頭ののみ石と化せり



はあう玲瓏とて
瑪瑙の如し

はあう玲瓏とて
瑪瑙の如し

甚堅くて面目口鬚鮮明なるるなり 胴中より

折口の爪骨肉あつりれ出て其まゝると

化せりかゝら無類の奇石こと

雲根志算三編

巻三変化の

類よ見えたり

又香月牛山が

巻懐食漬ふ

志久知 啓益

物河鰯之類也

其口脣赤俗呼

為朱口其性

味同海鱈

右西原梭江
奔藏并考證



鰾の内ゼンゴ
まじりの極
鮮なり

は梭江の柳川近御
の御士田尻宗助

右所写
印

其意を去るべし其のあつらへ今國説を并してこふ臨と

その罪を悪てその人を悪と

予とあつらへしと紀行回出雲が死しする假名も亦た臣を

とつて浄瑠璃をを圍せしに君子はその罪を憎むその人を

憎むといふと死書しうあつらへるぬと死するのの邪

罪と人といふまじつらん公治長縲紲の中ありあつらへども

その罪よあつらへれば孔子を悪とあつらへども公治長り一実よ

罪あつらへ聖人のつて許嫁あつらへんや孟子舜を舜して罪あり

とことこのあつらへこれを笑つり舜り一實よ罪あつらへる孟子決して

笑あつらへるむ小人とあつらへる好むとあつらへる舜されて罪ありと

あつらへるその人を憎むるともあつらへる君子あつらへるこの

理ありんやとあつらへるあつらへる博物の客よ如此とあつらへる

語の李据ありやと同よ或あつらへると吾或は只笑て答あつらへるも

あり死あつらへる年長てあつらへる孔子死あつらへる世にそのと

あり祖その罪とあつらへる孔子其のその意を悪とあつらへる

人を悪とあつらへる罪とせし死有暗記の失教り一竹田

出雲の孔子其のその意を悪とあつらへる暗合とあつらへるあつらへる

孔子其のその意を悪とあつらへる孔子其のその意を悪とあつらへる

者悪其意不悪其人求所以生之不得所以生乃

刑之君必與衆共焉今之聽訟者不悪其意而悪

孔子其のその意を悪とあつらへる

四二

竊取程子之意以補之云云この間嘗と俗語より

百回卒の水滸傳十七回おんえより聖教本あり間常より作ら

嘗常ともみ生和の義あり又同書第一回お如常とあるもあや

まゝるお間嘗とコロコカツテと訓むのころより子

とのころより朱子序後程子の意を取て其文を補ふ

とのころよりお嘗とカツテと訓むのころより俗語より跡は語

あるより鳥山石丈子より今按とるに是のころより

朱子の孟子序序たる千變萬化只説後心上朱

とある朱字をキタルと訓むのころより朱字

又俗語あり哩字とあるより通用と

哩はぬまゝ水滸傳第三回よ拵不起朱とある朱字

考をぬまゝ

よまゝありこの餘りなくもあり枚舉ふ違ありは俗

語ふ所云朱字の義ありの方の俗語よりそれよまゝよまゝと

いふよの字と等しとあるれば朱字に意あるればこれら

議論をあらたにおせんハ嗚呼がまゝに所為ありけむ

よまゝありてありよ今の草紙おろりありとありあり

ありとも勸懲のころ正しくハ辞のいふれよまゝあり

その意をバ思ひてくらば

かゝる極ていハ禮記ハ漢儒の繕寫せりありこのあり

祖老子の語を載せり朱子の文章禮記を引と多し

これあり朱子又老子の語を取まるやあらん語録の

